



川柳 雛まつり 川柳寺雀羅

雛祭については、閩里歳時記上に

—又二月廿八日頃より、家々にひるなごで、小き人形を立ならぶ、男は束帯、女は五衣著たるを一對さし、内裏雛さいふ、其外數品枚擧にいこもあらず、兒女ある家には殊に此佳節を祝ふなり、中略荆楚歳時記に 三月三日鼠麴の汁を取て米粉に和し、龍舌餅と名づく、これを食すれば灰三時氣とあり、此方には文徳實録に、田野に草あり、俗に母子草と名づく、三月三日婦女これを取て蒸し、擣て餅とするよし見えたり、夫未集に好忠が歌は、こつむ三月の月に成ぬればひらけぬらしな我宿の桃とあれば、和漢にも其例久し、今は多く艾草を用ゆ、稀に母子草を用るもあり、艾草方言もちぐさといふ。中略、少女これを玩ぶ事は、世帯のしわざを知しむるためなりと或人いへり。

こあつて、尙江戸年中行事、吉原年中行事、民間時令、年中故事、骨董集、嬉遊笑覽、松尾筆記、近世風俗志、玉かつま其他の諸書に詳かであります。年中時令

○蛤供 是の貝を以て祭る、女子の教也是幾萬たりと餘の貝には不遇、一つの貝と貝とは能合、配偶定めり、女子は是を

第一さし是教を守るべし。

○桃酒 桃は陽木にして陰氣を排靈木、伊弉諾尊桃を以て陰氣を防ぎ給ふ事と也
○白酒 雛祭の供とす、傳に曰、古代桃に白き花なし、皆赤也、白酒と桃とにて赤白に表し、日月を祭るの意也。

これらの記事によつて、その有様は今も昔も變りないことが知れます。

最も盛に行はれたのは江戸時代の末期でありまして、東都歳事記によれば

二月二十五日より三月二日まで雛人形同調度の市立つ、街上に假屋を補ひ雛人形諸器物に至る迄全玉を鏤め造りて商ふ是を求むる人晝夜大路に滿てり、中にも十軒店を繁華の第一とす、内裏雛は寛政の頃江戸の人形師原舟月と云者一般の製を工夫し名づけて古今ひなといふ、是より已來世に行はれて大かた此製作にならへり、十軒店本町、尾張町、人形町、浅草茅町、池の端仲町、牛込神樂坂上、麴町三丁目、芝神明前等に市立つ、元祿の惣鹿子に中橋の雛市を記せり、今はなし云々

の如き有様であつたのです。

正月に次いで娘の子だちの楽しみにしたもので、

おそはつた通りに雛をねだるなり
ねだられた親爺さん仕方なしに
雛店へ素見のはずで娘ゆき
ほしい顔せまいぞ雛店へつれ
それぢや、ほんのひやかしにだけだよ云つ
たり、ほしい顔をしちやあ駄目だよの條件付
で出かけ、扱ねだられた

雛店で芝居に行かぬ筈にする
芝居をばやめて内裏の願なり
雛店で花見にゆかぬ筈にする
こいふ約束で買はされて
大きらだ大きらだ雛を擔ぎ込み
いやはや大散財をやらされましたよ。

雛段は二月の末より祭り、嫁入に來た時に
里から送るのもあり、當歳の女子ある家には
初の節句云つて取わけて祝ひ、親しい人や
縁者からも祝ひ物を送るこゝが盛でありまし
た。

袖風のやうな雛様叔父がくれ
中納言くらいを呉れるけちな伯父
伊勢屋の伯父さんは大納言のやうな雛でなく
中納言のやうなのや、紙雛の貧弱のしか呉れ
ない。

嫁さ嫁はなすを聞けば雛の事
見てが多いで三月が嫁くろふ
嫁の雛かざらぬうちに人だから
嫁娘南北朝の雛をたて
嫁さ小姑さは雛棚まで仲悪く南北朝のやうに
對立するこいふ有様

龍顔こゝに美はしき初の雛
初節句もろふたんびに立て直し
おいおいに割こみにくる初の雛
眞中に本店からの内裏雛
初節句の雛は新しいから殊に美しく、貰ふ
ものが増へるのであつちへ直し、此方へ置き
更へ、本店からの大きい立派なのは眞中に
据えて、扱て、三日の日の賑はしき
かしましく階下に並る雛の客
雛の膳客は左りや握り箸
の如く女子供のかしましく、多くは左りぎつ

ちよや、握り箸のいさけない者ばかり、
雛をほめるこのろつこい酒が出る
白酒をきれいに飲んだ鼻の先
雛の酒下戸を隔てぬ澄み濁り
清濁を分けてもてなす雛の酒
ひな祭り床の下から馳走する
白酒の徳利階下の下へ入れ
雛の酒みんな飲まれて泣いてゐる
雛の酒茶碗で飲んで吐られる
意地の汚なさ白酒でよふろよろ
よふろよろするは階下を遠ざける
紙雛に角力取らせる男の子
雛の座敷から男は押出され
雛祭り旦那さごぞへ行きなさい

桃酒白酒を雛段の下から出し御馳走したはい
ゝが、意地の汚い伊勢屋さん、澤山がぶがぶ
飲むものでない白酒によろよろする位ひに酔
ふのもある。そんな酔つばらいさんが、雛様
に角力を取らせるやうな男子は、さあ出て行
つた行つたり序で旦那様も一緒に……………

逆鱗がつて兄弟で雛をわけ
何事のやうに兄弟ひなをわけ
雛祭りこれからこうか姉さんの
姉妹同志では仲直りしたり、南北朝に分れた
りして、妹は

ひなをつかませぬで今朝つからのだま
ひなの棚いぢるご罰が當るによ
雛棚へ艾を置くは姉の智恵
手に取りたがるのを、罰が當りますよ云つ
て、仲々聞かぬので姉が案出して艾さ線香を
見せて、觸るさお灸ですよ。

尙雛の古川柳二三記してこの稿を終りまし
ます、

紙雛はころぶ時にも二人連れ
紙雛を隣の搗屋搗き倒し 一一 米搗屋
小笠原流で供へる雛の餅
袖形へのせてお針へ雛の菓子
初の雛亭主騒いでしかられる
ほめられてくれた名をいふ雛の主
うるさくてさうもならぬ雛を出し